

一六、一七世紀のスペイン「帝国」からみたアジア

- 南蛮漆器を主とする東洋の美術品の評価と、中南米へもたらされた日本美術の影響 -

川 村 やよい¹

Asia as seen by the Spanish “Empire” during the 16th and 17th Centuries
Appreciation of Namban lacquer and other Asian artistic objects,
and the Japanese art influences on Spanish America

Yayoi KAWAMURA

要 約

スペインに所存する南蛮漆器やその他のアジアの美術品の実態と歴史を調査した結果、一六、一七世紀にはこれらがとても貴重視された品であったことが指摘できる。スペイン「帝国」に属したマニラからメキシコを通じて中南米そしてスペインへ繋がるルートはとても重要な貿易ルートであり、このスペイン・ルートでかなりの日本やその他のアジアの美術品がスペインまで届けられた。また中間地である中南米では、一七世紀後半から日本の美術の影響を受けて、独自の屏風や漆器に似た工芸品が発達した。

キーワード：南蛮漆器、中南米、マニラ、メキシカン・ラッカー、パスト・バーニッシュ

Summary

Researching the Namban lacquer pieces and other artistic pieces from Asia preserved in Spain, a high appreciation that those pieces received in the 16th and 17th centuries is pointed out. The trade route from the Spanish Manila to Mexico and to Spain played a very important roll, as a considerable number of artistic goods from Asia were transported to Spain on this route. Besides, in Spanish America, receiving the influences of Japanese art they developed their own arts such as Mexican folding screens or American

¹ スペイン国立オビエド大学美術歴史准教授。スペイン政府経済省の科学研究プロジェクト *Protagonistas de la presencia e impacto del arte japonés en España*. HAR2014-55851-P と *Culturas Urbanas en la España Moderna: Policía, Gobernanza e Imaginarios (siglos XVI-XIX)*. HAR2015-64014-C3-1-R の研究メンバー。本稿は、日本学術振興会による外国人研究者招へい事業（受入先：長崎純心大学教授浅野ひとみ、期間：2016.7.3 - 8.3）によって仙台市博物館、東京藝術大学、上智大学、東洋陶磁美術館、大分県立美術館、長崎純心大学、江角記念館で行った二題の講演の一部に加筆したものである。関係先の方々には一方ならずお世話になったことを記して深謝する。

lacquers.

Keywords: Namban lacquer, Spanish America, Manila, Mexican lacquer, Past Varnish.

検討テーマ

日本で生まれた「南蛮時代」「南蛮文化」という概念は、ポルトガル人とスペイン人が初めてのヨーロッパ人として来日した結果、遠い異国の文化が日本に届けられ、キリスト教という異宗教が広まり、種々な面で西洋と日本の間での交流、相互影響そして衝突が生じた桃山から江戸初期のことを示す。しかしその後長い鎖国時代が続いたことで、日本の歴史上極めて特殊な一時期であるという位置付けとなっているような所がある。本論ではこの南蛮時代をそのような日本の観念から見るのではなく、当時のスペイン「帝国」側から見るとどのような時代であったかを、美術作品を通じて見て行くことを焦点とする。尚、ここでスペイン「帝国」とは当時スペイン王国が領地として治めていた世界に広がる全域を意味し、スペイン本土及び中南米とフィリピンを含めるものとする。皇帝が治めた領地ではないが、その広大な領土からここではあえて「帝国」と呼ぶことにする。また本文を通じて、日本以外で発表されているこの件に関する文献を脚注に紹介する。

時代背景

中世後期、ヨーロッパにとってはアジアとは漠然とした存在であったが、大敵であるイスラムの向こう側には、キリスト教を理解し応援してくれるプレスター・ジョンという君主がいるという古くからの伝説的な思いがあった。というのも、エフェソ公会議（431年）以降にキリスト教の正当派から離れたネストリウス派のキリスト教徒達がローマ帝国から東に向かってアジア全般へ分散していったことがその源である。ジンギスカンが東からイスラムを制覇した事件は、ヨーロッパにとっては、まさに極東にいるキリスト教徒の存在を明確としたものと取られた。又、マルコ・ポーロの父と叔父が最初に北京を訪れた際、ジンギスカンは母がネストリウス派キリスト教徒であったこともありキリスト教に高い関心を見せ、ヨーロッパから神父を送るように要請したと言われている。

しかしながら、ヨーロッパにとってアジアに関する情報は部分的で断片的なものであり、20年近くジンギスカンに仕えたマルコ・ポーロの『東方見聞録』が唯一の東洋に関する情報源であった。西暦1300年前後に書かれた『東方見聞録』を読むと、彼が中国で初めてヨーロッパにない白磁を見たことがわかる。表現する言葉がなく、地が白くて固いポルセーラ貝に似ているので、ポルセーラと呼んでいる。これが今のヨーロッパの磁器を表現する単語の語源となっている。英語では Porcelain、スペイン語では Porcelana である。

マルコ・ポーロは日本を訪れていないが、中国で得た情報を基に「ジパングには壁に金が貼ら

れた宮殿がある」と記している。漆で貼られた金箔、金粉や螺鈿で飾られた中尊寺金色堂のようなものの噂を聞いたのであろうか。以後ヨーロッパ人は、ジパングは金の国だと思い込んでしまう。

このような状況で、一五世紀半ばまではヨーロッパでは漠然としたアジアの情報しかなかったが、この世紀末にヨーロッパ人の世界観を変える出来事が次々と起った。大航海時代の始まりによって、世界は球状ということがわかり、ヨーロッパ以外にも広い土地、多くの人種が住む事が確認されたのである。コロンブスは西に行くインドに行ける、そして金の国ジパングにも到着すると信じ、スペイン王国、詳しくはカスティーヤ国イサベル女王の支援を得て、1492年にアメリカ大陸を発見した。一方、ポルトガルはだいが前からアフリカの西海岸を南下して探検を続けていた結果、喜望峰を越える事に成功し、バスコ・ダ・ガマは海洋ルートでインドに行けることを1498年に証明した。そして、大国スペインとポルトガルは両国の航海ルートの衝突を避けるため、1494年にトルデシーヤス協定を結び、大西洋上に南北に線を引き²、それより西はスペインが航海権を持つ地域、東はポルトガルと世界を両国間で二分してしまう。その二十年後、スペイン国王に使えたマジェランは世界一周を試み、彼自身はフィリピンで命を落すが、出発から三年後（1519-1522）にエルカノがアジアの香辛料を船に積みセビリア港に戻った。

大航海時代に栄えた港町というと、まずポルトガルのリスボン港である。一六世紀のリスボン港の風景画がいくつか知られているが、ナオと呼ばれる船が町の前を多く行き来している様子が描かれている。リスボンから出た船はポルトガルの航海権の海洋を東へとアジアに出て行った訳で、最終的には日本にまで到着したのである。当時のポルトガル人にとっては「インド」とは日本を含むアジア全般を示す言葉であった。

一方、スペインの大航海時代のベースはセビリアであった。河口からグアダルキビル川を80キロほど上がった内陸の港である。1588年出版の主要都市の絵地図が載っている地図帳『Theatrum Orbis Terrarum』の中に載せられているセビリアの町には、ガレオン船がずらりと港に停泊している様子が描かれている。スペインは、一六世紀に西インド諸島から中南米を征服してスペイン帝国の一部とし、中米にヌエバ・エスパーニャ副王国と南米にペルー副王国を設けて、スペイン語とキリスト教を普及していく。と同時にさらに西へと進み、太平洋を超えてフィリピンを征服し、その首都マニラがスペインの町として栄え出す。

その結果、一六世紀の半ばにはイベリア半島とアジアを結ぶ二ルートが確立し、グローバル時代がスタートした（図1）。一つはリスボン／ゴア／マラッカ／マカオを結ぶポルトガル・ルートで、その後オランダ、イギリス、フランスもこのルートでアジアへやってくる。そしてもう一方は、セビリア／ベラクルス／メキシコ／アカプルコ／マニラを結ぶスペインのルートである。これらの二ルートを通じてアジアの商品や工芸品がイベリア半島に届けられるようになる。

² 大西洋にあるカボ・ベルデ島から西370レグア（1770km）に位置した。一年前の1493年の合意では100レグアであったが、ポルトガル側は今のブラジルあたりに陸があるらしいことをどうやら認識していたようで、370レグアを主張した。

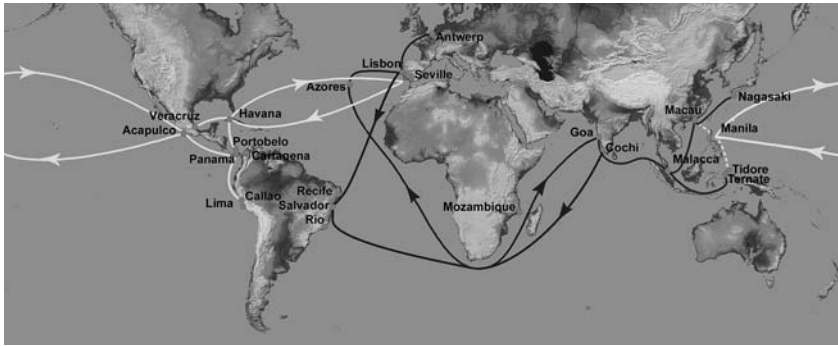


図1 一六世紀にイベリア半島とアジアを結ぶ二ルート

出典 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:16th_century_Portuguese_Spanish_trade_routes.png

スペインでは中南米もアジアも「インド」と呼ばれた時代である。つまり、南蛮時代とはこの大きな世界レベルで発展した出来事の一部であり、スペイン帝国から見れば、日本はアジアの中の、そして「インド」の中の、一国でしかなかった。

南蛮時代のスペイン帝国とアジア趣味の誕生

この時代のスペイン帝国に、どのようなアジアの美術工芸品が届くようになったかを検討することにする。当時のスペイン王国はハプスブルグ朝の時代であり、カール五世神聖ローマ帝国皇帝の時代(1516-1556)に中南米の支配の基礎が築かれた。彼の息子フェリーペ二世(1556-1598)は「慎重な王」と呼ばれ、君主となるための教育を充分に受けて育った人間であった。彼の時代に中南米の支配が確固なものとなり、フィリピンに領土を広めた。フェリーペ二世に因んでフィリピンと呼ばれるようになった地である。そして、1580年にポルトガルを支配下にし「太陽の沈まぬ帝国」を築いた。彼の時代は、ルターの宗教改革の反動としてカトリック宗教改革がローマ教会から始まり、その精神がこの王の政治の基礎となっていた。この王の時代にイエズス会の宣教師が企画した天正少年使節がポルトガル、スペインそしてイタリアを訪れており、1584年にスペイン国王に謁見している。次のフェリーペ三世の時代(1598-1621)という、少々君主としての教育がいきとどかなかった国王で、寵臣レルマ公爵が政治を牛耳り、汚職が広まった時代であった。この時代に慶長遣欧使節がスペインを訪れており、支倉常長は1615年に国王に謁見している。そして、南蛮最終期の国王はフェリーペ四世(1621-1665)で、彼は寵臣オリバーレス伯公爵を通して政治を行い、文化はとても栄えたが経済危機などがあり、また1640年にはポルトガル独立戦争が始り長期の戦争となった。

まず、四十二年も続いたフェリーペ二世の時代に焦点を当てて、東洋の美術品を検討する。フェリーペ二世の財産目録が国王没後数年(1598-1607)にかけて作成され、現在はマドリッド宮殿の古文館に保存されている³(図2)。この目録を読んでいくと、アジアから届いたものが含まれ

ていることがわかる。まず中国製磁器が3,000点も記録されている。その内、食事セットとして染付磁器が2,500点あったと記録されている。現在ゴンザルベス博物館（リスボン）に保存されている円形の瓶一点は、ライオンと城の組合わさったスペイン王家の紋付きであり、フェリーペ二世の食事セットの一点であったと考えられている⁴。紋から見て、中国へ特別注文した品ということがわかる。また、大阪の南蛮文化館にも同じような作品が一点保存されている。

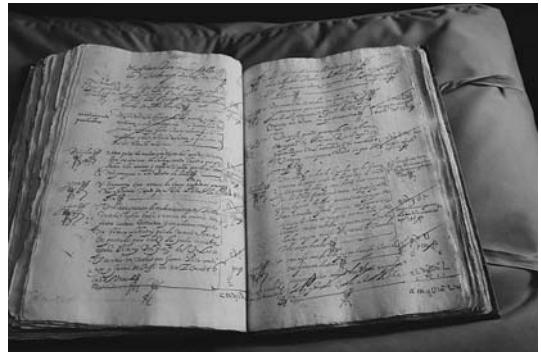


図2 フェリーペ二世の財産目録

次に挙げられるアジアのものは「インドのラッカー」「ポルトガルのインドのラッカー」「中国のラッカー」と記されている品々である⁵。総計43点あり、その内「黒地のラッカーの上に金で枝、草、鳥、動物が描かれている」という作品が21点数え上げられる。表現からして、インド製のラッカーもしくは日本製の南蛮漆器だったかも知れないと思われる品々である。南蛮漆器とは、南蛮人の需要に応じて日本で生産された輸出用漆器で、西洋スタイルの櫃、箆笥、箱等で、螺鈿と蒔絵で草木、鳥、獅子などの模様がぎっしり詰まった装飾である。幾何学模様の縁取りがあるのも特徴である。また当時インドでも黒地に金で細かく草木が描かれたインドカラーの家具が作られていたことが知られている⁶。黒地の家具というものはヨーロッパには存在しなかったので、日本漆器やインドラッカーは、黒檀でできた品と共に貴重なものとされ、国王が持っていてもおかしくない品であった。

この財産目録の一頁に、唯一「ハボン」（日本）から届いたとはっきり書かれているものが二点記録されている⁷。「Japón」「laqueado」という言葉が読み取れ、日本から届いたラッカーでできたものという意味である。説明文はかなり長く「小さい祈祷壇のような二枚扉のインドの箱。高さ1バラ（84センチ）幅2/3バラ（55センチ）奥行き2/3バラ。下部に引き出し有り。内は紙貼り、外は黒地のラッカーでできていて、彫金で飾りが施された金色の金具付き。日本から来

³ サンチェス・カントン氏によって1950年代にこの史料が研究され、全文が出版されている。F. J. Sánchez Cantón, *Inventarios reales. Bienes muebles que pertenecieron a Felipe II*, Archivo Documental Español, tomos X y XI, Madrid, 1956-1959.

⁴ A. Pleguezuelo, “Regalos del Galeón. La porcelana y las lozas ibéricas de la Edad Moderna”, A. Morales [dir.], *Filipinas, puerta de Oriente: de Legazpi a Malaspina*, Sociedad Estatal para la Acción Cultural Exterior-Lunwerg, Madrid-Barcelona, 2003, p. 131-145.

⁵ Y. Kawamura, “Laca japonesa urushi de estilo Namban en España. Vías de su llegada y sus destinos”, Kawamura [dir.], *Laca Namban. Huella de Japón en España. IV Centenario de la Embajada Keichō*, Fundación Japón, Ministerio de Educación, Cultura y Deporte, Madrid, 2013, p. 249-296.

⁶ ウィーンのオーストリア応用美術博物館 MAK に、フェリーペ二世がハプスブルグの親類に贈ったのでないかとされているインドラッカーの机が保存されている。

⁷ F. J. Sánchez Cantón（前掲注3）p. 349. Y. Kawamura（前掲注5）。

たもの⁸と記されている。この文からは仏壇のようなものが想像されるが、南蛮漆器で仏壇に似た祈祷壇が作られていたことはインピー、ヨーグ両氏の研究で知られている⁹。

しかし、この「インドの箱」二点のみ「日本」から届いたとはっきり記されていることを考慮すると、特別に日本から送られたものではなかったかと考えられる。実は1590年に豊臣秀吉がインド副王宛へ贈答品を送っており、その中に鎧兜二領が含まれていた。贈答品は最終的にはフェリーペ二世に奉納され、1594年にエスコリアル宮殿で陳列されたと記録にある¹⁰。王の財産目録にあるこの二点は、その時に届いた観音開きの鎧櫃ではないかと思われる。国王の亡くなるたった四年前に日本の要人から届いた贈答品で、まだ日本から届いたという記録が鮮明だったので、「日本から来た」とはっきり記されているのだと考えられる¹¹。

次はフェリーペ二世の妹でマクシミリアン皇帝の妻であったマリア皇后について触れる。彼女はウィーンで長く暮らした後、皇帝が没した後スペインに戻り、1582年からマドリッドのデスカールサス修道院で引退生活を始めた。この修道院は妹にあたるファナが建立したもので、ハプスブルグ家の女性の隠れた宮殿ともいえよう。ここで、1603年にマリア皇后は永眠する。実はこの修道院内に「聖遺物室」と呼ばれる特別な部屋がある。「驚きの部屋」ヴンダー・カマーに相当する部屋で、スペイン製、ヨーロッパ諸国製、中南米製、アジア製の工芸品の入れ物がずらりと、ひな壇状に並んでいる。当時カトリック教会で重視された聖人崇拜の結果、聖人の遺物や遺骨を集めることが流行し、それらをきれいな箱に入れて陳列するために建てられたのが聖遺物室である。中に入ると、ハッと感嘆する部屋である。

その中央のきわめて重要な位置に置かれているのが、きれいな日本製の質の高い蒔絵で作られた洋櫃である¹²（図3）。中には聖バレリオの遺骨が収まっている。1610年に修道院をよく知ったカリージョ神父が「マリア皇妃は、ドイツから聖バレリオの遺骨が納まった金とパールで刺繍された大きな櫃を持参した」と記録しており、女子修道院という所はとても代々の習慣を大切にするところなので、この洋櫃はマリアが奉納したものであろうというのが今の定説である¹³。

同じ部屋に、その他にもアジアから届いた工芸品の櫃がある。一六世紀半ばから後半のインド

⁸ スペイン語の原文は《Una caja de madera de la Yndia, con dos puertas a manera de oratorio, quadrada, de una vara de alto y dos tercias de ancho y otras dos de hueco con un caxón en lo bajo, forrada por dentro en papel y por de fuera laqueado de negro guarnecida de chapas de latón cincelado y dorado, que vino del Japón.》

⁹ O. Impey & C. Jörg, *Japanese Export Lacquer 1580-1850*, Hotei Publishing, Amsterdam, 2005, p. 190. クリステイーズのオークションに出されたことで知られている。

¹⁰ M. R. Arias Estévez, “La armadura del samurái: de valiosos regalos a estímulos de la imaginación”, Kawamura [dir.] (前掲注5) p. 231-248.

¹¹ 川村やよい「スペイン所在の南蛮漆器についての考察」『國華』1415号、2013年、36-49頁。

¹² A. García Sanz & A. Jordan Gschwend, “Vía Orientalis: Objetos del Lejano Oriente en el Monasterio de las Descalzas Reales”, *Reales Sitios*, 138, Madrid, 1998, p. 25-39. 山崎剛『海を渡った日本漆器（16-17世紀）』（日本の美術426号）2001年、19頁。O. Impey & C. Jörg（前掲注5）p. 147, 286-287. 日高薫『異国の表象』、ブリュク、2008年、43頁。川村やよい（前掲注11）。

¹³ O. Impey & C. Jörg（前掲注5）p. 286-287.

のグジャラート地方で作られた貝貼細工と螺鈿象眼の櫃が各一点である¹⁴（図4）。因みに、同じようなインドの貝貼細工の小箱と、やはり同時代のインド製のべっ甲の小箱が、フェリーペ二世が建立したエスコリアル宮殿にも保存されている¹⁵。

次はグアダルーペのサンタ・マリア修道院であるが、フェリーペ二世の擁護を受けたジェロニモス会の修道院で、院内にはこの国王の時代に建てられた八角堂の聖遺物堂がある。ここも堂内に入ると圧倒されるような部屋であり、ずらりと遺物が種々の容器に収まって整然と並んでいる。中には南蛮漆器の洋櫃が四点もあり、全てに聖人の遺骨が収納されている（図5）。

その他に、フェリーペ二世時代の王室関係者の財産目録に注目してみたい。国王の叔母にあたるハンガリー王妃マリアは「黒地に金のインドの櫃」二点と「螺鈿でできた机と箱」を一点ずつ持っていたとある。フェリーペ二世の妻エリザベート・ド・ヴァロワは「ポルトガル王妃から贈られた黒地のラッカーの机」を持っており、国王の妹のポルトガル皇太子妃フアナはメディナ・シドネア公爵へ「黒地に金色の机」を贈ったとあり、また「中国から届けられた中に整理箱がついた黒地に金色の小型書筆筒」を所有していた。また、国王に使えた建築家エレラの未亡人イネスの財産の中には「黒地に鳥などの金模様があるインドの櫃」と「黒地に金模様のインドの机」が記されている¹⁶。どれも南蛮漆器を彷彿さ



図3 デスカルサス修道院聖遺物室内の南蛮漆器洋櫃



図4 デスカルサス修道院聖遺物室内のインド製螺鈿象眼櫃



図5 グアダルーペ・サンタ・マリア修道院聖遺物堂内の南蛮漆器洋櫃

¹⁴ A. García Sanz, “Relicarios de Oriente”, M. Alfonso Mora & C. Martínez Shaw [dirs.], *Oriente en Palacio*, Patrimonio Nacional, Madrid, 2003, p. 129-141.

¹⁵ 同上。

¹⁶ M. P. Aguiló Alonso, “El interés por lo exótico. Precisiones acerca del coleccionismo de arte namban en el siglo XVI”, *Centro de Estudios Históricos, Actas de las IX Jornadas de Arte, El arte en las cortes de Carlos V y Felipe II*, CSIC, Madrid, 1999, p. 151-168.

せる品々である。

次の代のフェリーペ三世時代に関してであるが、国王の寵臣レルマ公爵の財産目録を読むと、フィリピンから届いた書筆笥と聖体入れの箱が各一点とあり、南蛮漆器であった可能性がとても高い。また、フェリーペ三世の妻マルガリータ王妃の財産目録には「インドから届いた引出し二十一個と角金具がついた黒檀と象牙でできた書筆笥」が記されているが、黒檀とは黒漆であった可能性が非常に高いし、螺鈿を象牙と見てしまった可能性も指摘できるので、南蛮漆器であったかもしれない。同目録に「インドから届いた引出しと角金具がついた書筆笥」が二点も挙げられており、同じような日本の筆笥であったかもしれない¹⁷。当時のエリート階級の人間がアジアから届けられた南蛮漆器またはそれを彷彿させる櫃や筆笥を持っていたことがわかる。

そしてこのマルガリータ王妃であるが、1611年にマドリッドにエンカルナシオン修道院を建立しており、この修道院にもデスカラス修道院と同じく「聖遺物室」がある。四壁に棚があり、その中に何百という遺骨がさまざまな形の容器に収入されずらりと並んでいる。その中に南蛮漆器のとても質のよい平たな蓋の洋櫃がある（図6）。形も珍しいので特別注文と思われる大きな櫃である¹⁸。その他に小型洋櫃が奉納されている。王妃の奉納品である可能性が高い品々である。



図6 エンカルナシオン修道院聖遺物室内の南蛮漆器洋櫃

次はフェリーペ四世時代、つまり南蛮時代が幕を閉じる時代であるが、当時の政府要人モンテレイ伯爵の財産目録にも南蛮漆器のような「鳥と花模様の書筆笥」が一点が見受けられ、また「インドから届いた金と多色で人物が描かれた屏風二点」が記録されている¹⁹。これは日本製の南蛮屏風のようなものではなかったであろうかと察される。スペイン語で屏風とは *biombo* と言い、1600年前後に生まれた言葉で日本語にその語源を持つこともここで指摘しておこう。

そのフェリーペ四世時代に宮廷では何が流行したかを、肖像画を通して見よう。かの有名な王室付き画家ベラスケスの「フェリーペ四世像」（1624年、メトロポリタン美術館蔵）と「オリバーレス伯爵像」（1624年、ヒスパニック・ソサエティー・オブ・アメリカ蔵）を見ると、両者ともりっぱな金のチェーンを肩からかけており、当時の流行であったことがわかる。この金のチェー

¹⁷ 同上。

¹⁸ Y. Kawamura, “Obras de laca del arte Namban en los monasterios de la Encarnación y de las Trinitarias de Madrid”, *Reales Sitios*, 147, Madrid, 2001, p. 2-12.

¹⁹ M. P. Aguiló Alonso, *El mueble español durante los siglos XVI y XVII*, Editorial Universidad Complutense, Madrid, 1990, tomo II, p. 597; M. P. Aguiló Alonso, “Muebles y escritorios en las colecciones de Vincencio Juan de Lastanosa”, C. Morte García, C. & C. Garcés Manau [coord.], *Vincencio Juan de Lastanosa (1607-1681). La pasión de saber*, Instituto de Estudios Altoaragoneses, Zaragoza, 2007, p. 97-107.

ンは、最近の研究で、実は中国から届けられたものであることが知られている²⁰。マドリッドのバレンシア・デ・ドン・フアン研究所には当時の中国製の金のチェーンが保存されている。これらからわかることは、一六世紀後半から一七世紀の前半にスペインにはアジアから磁器、漆器、螺鈿、貝細工、そして金細工も届けられていたということである。

マニラと日本の関係と美術品の動き

次に、マニラと日本関係に焦点を当てて、スペイン帝国と日本の関係を見ることにする。ベラスケスはまだ若い時期1620年にセビリアで「ヘロニマ・デ・ラ・フエンテ修道女」の肖像画を描いている²¹。66歳の修道女がセビリア港からヌエバ・エスパーニャ（中米）に向かう船に乗る直前の肖像画であるが、彼女の目的はヌエバ・エスパーニャに行くことではなく、その後太平洋を渡りマニラに行くことであった。確かに67歳でマニラでサンタ・クララ修道院を建立した。この作品は彼女の固い意志が伝わってくる肖像画であると共に、セビリアとマニラが繋がっていた事実を語る絵画でもある。

フェリーペ二世の時代には、前述のとおり、スペインはフィリピンを領土としマニラがスペインの都市として栄え出した時である。1565年に黒潮に乗って北太平洋周りでヌエバ・エスパーニャに戻るマニラ～アカプルコ間の航海ルートが発見された後、1566年から1815年の間マニラ・ガレオン船と呼ばれる定期便が108回太平洋を渡った。このルートは、ポルトガルの希望岬周りのアジアへのルート、強いて言えばイエズス会ルートに対抗するルートとなった。マニラでは、ヌエバ・エスパーニャ副王の管下でフィリピン総督が行政を行っていた。又このルートで、ヌエバ・エスパーニャからドミニコ会、フランシスコ会、アウグスティノ会の神父がマニラにやって来て、この町をアジアでの宣教のベースとした。その結果、マニラへは中南米の銀貨が流れていき、マニラからアジアの物産がメキシコに届けられる貿易が成立した。当時の東シナ海では日本を含む各国の船が行き来しており、マニラはアジア各地と繋がっていたことが知られている。

そのような中で、日本とフィリピンの関係は良くなったり悪くなったりであった。1590年代からマニラ経由でドミニコ会、フランシスコ会の宣教師が日本を訪れるようになる。1596年に起こった「サン・フェリーペ号事件」によって秀吉とスペインの関係は悪化する²²。それが発端となり、翌年1597には長崎で二十六聖人が殉教している。しかし一年後には秀吉は亡くなる。すると徳川家康はマニラと関東の貿易に興味を示し、1600年に日本にいたフランシスコ会宣教師のへ

²⁰ L. Arbeteta Mira, “Banda”, *El Galeón de Manila*, Ministerio de Educación, Cultura y Deporte, Ministerio de Asuntos Exteriores, Fundación Focus-Abengoa, Sevilla, 2000, p. 185.

²¹ プラド美術館蔵、A. E. Pérez Sánchez, *El retrato español. Del Greco a Picasso*, Museo Nacional del Prado, Madrid, 2004, p. 342-343.

²² フェリーペ号が土佐に漂着し、積み荷が没収されるという事件。船長 Matias de Landecho が地図を見せスペイン帝国はこんなに広く強いと強行な態度を示し、また日本側はスペインはまず宣教師を派遣しその後軍隊を送ってくると解釈した。

ロニモ・デ・ヘススを自分の使節としてマニラへ送った。日西関係がよくなりそうだった時期であった。その後1609年にマニラの総督ロドリゴ・デ・ビペロがヌエバ・エスパーニャに帰国する途中乗っていたサン・フランシスコ号が難破し上総国に漂着したが、家康の手配でウィリアム・アダムス（三浦按針）の建造した船で1610年に帰国した。ビペロと共にアロンソ・ムニョス宣教師、日本人商人田中勝介が太平洋を渡っている。ビペロは『ドン・ロドリゴ日本見聞録』を書き残しており、日本の情報や貿易の情報のよい史料となっている。

続いて翌年1611年にはセバ스티アン・ピスカイノがヌエバ・エスパーニャから答礼使として訪日、田中勝介も帰国した。その後、徳川家康の承認を得た形で伊達政宗が貿易の利益を考えての使節をヌエバ・エスパーニャに送った。日本史上よく知られた支倉常長の慶長遣欧使節である。ピスカイノとソテロ宣教師と共に1613年に奥州の月が浦から出発した。ヌエバ・エスパーニャとの貿易許可をスペイン国王から得るのが目的の旅であったが、目的は達成できなかった。支倉がスペイン、ローマを訪問している間に、家康は禁教令を強化しキリシタンへの迫害を厳しくしていった。その中で、1620年に、マニラで二年も足止めされた後、支倉常長はこっそりと帰国した。これで南蛮時代の日西の関係が終わったといえよう。

さて、マニラ・日本関係を知るには史料の調査が必要であるが、それが保存されているのが、セビリアのインディアス総合古文書館である(図7)。一六世紀から一九世紀のフィリピン関係の書類は1000巻以上保存されているが、南蛮時代の史料としては会計記録がまず挙げられる。マニラに入港した船が納めた税金、マニラ地域に住居許可を持った外人が払った許可税、フィリピンの行政のために働



図7 セビリアのインディアス総合古文書館

いた人間への給料の支払いなどが記録されている。日本の船がどこから誰を船長にして入港したという情報や、1614年の禁教令以降マニラやその近辺に住み着いた日本人キリシタンの名前、またスペイン軍の要塞で仕事をしていた日本人グループの存在などがわかる。もう一方では、公証人の記録が残っており、その中には訴訟の記録や死亡者の財産目録などが含まれている。その他に、行政関係の要人がヌエバ・エスパーニャやスペインに送った手紙の写しが保存されている。これらのマニラで書かれた史料を読むと、日本という国をはっきり認識し区別していることがよくわかる。漠然とした「インド」の一部ではなく、日本の長崎、中国のマカオ、インド、コチンとアジアの土地名が細かく記されている。

この史料を調査した結果、中から三件興味のある事柄を紹介することにする。第一史料は1600年に書かれたもので「日本から来た使節が持って来た商品」という見出しがかった書類である²³。

²³ Archivo General de Indias, Audiencia de Filipinas, sig.: FILIPINAS.7, R.7, N.88.

使節の名前は記されていないが、年からして大使とは家康が送ったヘロニモ・デ・ヘススで間違いないであろう。彼はかなりの贈答品を総督に持ってきたはずであるが、そのリストは残っていない。しかしその他に、マニラで売っているかなりの商品を持ってくる。その中で美術品と工芸品を拾ってみよう。

まず「xubacu」と呼ばれる「金色のバーニッシュ」でできた箱が31点。これは漆の蒔絵で作られた重箱のことである。同じく「金色のバーニッシュ」でできた鏡箱が14点と女性用鏡台2点。

「biobo」が入った箱30箱で、biobo は二点ごと箱に収まっていて合計60点とある。つまり日本の屏風が30双である。そして日本刀500点とある。日本の漆器、屏風、刀がマニラでよく売れる商品であったことがよくわかる貴重な情報である。

第二の史料は1612年のもので、マニラ裁判所の判事デ・ラ・ベガがスペインへ送った結婚祝いの手紙の写しである。当時スペイン政府にはインディアス枢機会議と呼ばれる中南米の統治の最高権威があり、その書記長ルイス・コントレーラス氏がメキシコ裁判所の判事グレロの娘と結婚することを知ったのでお祝いを送るという内容である²⁴。よく読んでいくと、二年前の1610年に「日本製の金色の筆筒」を貴方に送ったがメキシコで行き違いがありスペインまで届かなかったとある。調べてみると、1610年とはルイス・コントレーラスが書記長へ昇進した年なので、昇進祝いであったと想像される。届かなかったことがわかり、また今回は結婚されたことを知ったので「もっと大きい日本製の金色の筆筒」を貴方に送らせてもらうという内容である。「琥珀と金の木を詰めて送りたいかったが」そこまでは至らなかったとも書かれている。「日本製の金色の筆筒」とは蒔絵でできた南蛮漆器の筆筒であったということが想像される。自分の最高上司に当る人への贈答品に南蛮漆器を選んでいるのである。高価で珍しいもの、そしてスペインで貴重にされるものを送っているはずである。その意味で、南蛮漆器はそのような評価をされていたということがわかる重要な史料である。スペインに今でも所在する南蛮漆器の書筆筒は数点知られており、代々の貴族や歴史上の要人がよく出た家族で保存されているが、そのようなものが1612年にマニラから結婚祝いとしてスペインまで送られたのである。

第三番目の史料は、1624年のファハルド総督の財産目録である²⁵。ファハルド総督は1618年にマニラに就任していて、最近の研究でセビリアから支倉常長と同じ船で大西洋を渡っていることが知られている²⁶。支倉の事情をよく知り1620年までマニラで世話をしてくれた総督かと思われる。そのファハルド総督は1624年にマニラで客死しており、相続のため財産目録が作成された。何十枚にわたる書類であるが、その中に日本製の品々がかなり記されていることが注目される。

人物が描かれ金色の日本の「biombo」が数点、つまり日本の屏風である。日本の鎧が5点、日本刀が14点、そして日本の槍が44点。良質の「kimono」が2点。日本製の台のついた十字架が1点。日本製の書見台が5点。引出し付きの日本の筆筒が5点で、その内2点は金色。日本製

²⁴ Archivo General de Indias, Sig.: FILIPINAS, 38, N.54.

²⁵ Archivo General de Indias, FILIPINAS, Escribanía 439.

²⁶ A. L. Schlatter Navarro, *La embajada Keicho y Espartina*, Ayuntamiento de Espartina, 2014, p. 87.

の小さな整理箱が15点。日本製の金色の箱が1点。日本製の櫃が6点。日本製の瓶入れの箱が1点。日本製の模様が描かれた布が1点。日本製の筆記セット（インク壺と砂壺）が1セットである。人物が描かれ金色の日本の「biombo」とは南蛮屏風のようなものであったであろうか。金色の引出し付きの日本の筆筒は、蒔絵の南蛮漆器の筆筒であったはずである。日本製の書見台、十字架なら、やはり南蛮漆器であったであろう。また、日本の鋼は良質だったので日本刀や槍は尊重された武器であったこともわかる。日本の漆器、屏風、刀などがマニラで入手することができたことを示す興味高い記録である。

彼の財産目録には日本以外のアジア製の品々も記されている。マニラかインド製と考えられる象牙の聖母像とキリスト像が5点。インド製のベッドカバーと刺繍入の枕が各1点。マカオ製の22カラットの金の鎖が1点。東南アジア製と思われるルビー、サファイヤ、ダイヤの指輪が数点。そして、中国製の団扇が3点とインド製の槍が29点である。スペインでは今でもかなりの数の一七世紀のマニラ製の象牙でできたマリア像、キリスト像が保存されている。マニラに住み着いた華僑の職人が作った作品である。マリア像に関しては、卵形で少々アジア的な顔つきで観音像に少し似た感がある（図8）。またインドで作られた子供のキリスト像も数点知られており、図像としては仏像やヒンズー教のプリスター像と一致する点があることが特徴である。「マカオ製の22カラットの金の鎖」とは上記したフェリーベ四世が所有していた金のチェーンであり、史料上でもはっきりマニラ経由でスペインに届けられた可能性がよくわかる。また「インド製のベッドカバーと刺繍入の枕」に関しては、今でもスペインに17世紀のインド製の刺繍が残っている²⁷。つまり、マニラを通じてアジアの工芸品がヌエバ・エスパーニャやスペインへ届けられたということがわかる史料である。



図8 セビリア大聖堂蔵、マニラ製象牙マリア像

次に古文書から離れて、海洋考古学に目を向けよう。マニラの町は湾の奥に位置していたが、時々オランダ船の攻撃を受けるということがあった。その中で、1600年のスペインとオランダ間の海戦はよく知られた事件である。ファン・ノールトが率いたオランダ艦隊の攻撃を受けたスペインのガレオン船サン・ディエゴ号は、マニラ湾で沈没した。スペイン側のマニラの判事アントニオ・モルガが『フィリピン諸島誌』の中で詳しく述べている²⁸。このサン・ディエゴ号の積荷が1991年から93年にかけて海底から引き上げられ、その中で多くの明朝の陶磁器が確認された。マドリードのナバル博物館とフィリピン民俗博物館に保存されている（図9）。中国陶磁器が

²⁷ エル・エスコリアル宮殿蔵。P. Benito, “Frontal de altar y fragmento de colgadura”, A. Morales Martínez [dir.], *Filipinas, puerta de Oriente: de Legazpi a Malaspina* (前掲注4) p. 278-279.

²⁸ A. Morga, *Sucesos de las Islas Filipinas*, Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes & Biblioteca Nacional, Alicante & Madrid, 2010 (原本はスペイン国立図書館所蔵)。

マニラ・ガレオン船の重要な商品であったことがわかる資料である。

太平洋を108回渡ったマニラ・ガレオン船は夏の末にマニラ港を出て、クリスマスまでにはアカプルコに入港していた。その後商品は税関を通りメキシコ・シティーへ運ばれ、春のパリアンの市で売られたことが知られている。日本の漆器や屏風、中国の磁器、フィリピン象牙、インドや中国の絹や刺繍などと国際色高い市であったのである。



図9 ナバール博物館蔵。サン・ディエゴ号の積み荷の一部、明朝の陶磁器等

太平洋を渡る南蛮漆器

次に、焦点を日本の美術品である南蛮漆器に置いてみよう。現時点で、マニラから中南米に届けられた南蛮漆器は何点も確認されている。ニューヨークのブルックリン美術館の南蛮漆器の小型洋櫃は1941年に当時の学芸員スピデンがペルーで購入したと記録にある²⁹。大分県立歴史博物館に保存されている南蛮漆器の聖龕はプエルト・リコで発見されたものである³⁰。京都国立博物館蔵の「三位一体像」の聖龕は、図像学上メキシコで描かれたとして間違いない³¹。また、東京国立博物館には鳥の羽フェザーでできた絵の入った聖龕がある。フェザーはメキシコの工芸品であり、とても珍しい作品である。その他、最近メキシコで存在が確認された南蛮漆器の聖龕や聖餅箱がある。改造されて額縁になった南蛮漆器がリマの個人蔵にある事も知られている³²。しかし、ブエノス・アイレス装飾美術館が所蔵する大型の洋櫃は、二〇世紀前半にスペインで購入されてアルゼンチンへ持っていかれたものなので、マニラ～アカプルコ・ルートで届いたとは言えない作品である³³。

マニラから中南米へ運ばれその後スペインまで届けられた南蛮漆器はというと、数点はっきりと言える作品がスペインに所存する。サラマンカにあるドミニコ会のサン・エステバン修道院に代々伝わる南蛮漆器の十字架は、一七世紀前半のマニラ製の象牙のキリスト像が上にのせられている(図10)。十字架の大きさに対して均衡がよく取れた像であるので、マニラで十字架を受け取ってから像が作られたと思われる³⁴。またマニラはドミニコ会のアジアの宣教ベースであっ

²⁹ 情報を提供していただいた同美術館の学芸員アマンダ・イマイ氏に感謝する。

³⁰ 山崎剛(前掲注12) 2頁。

³¹ 永島明子、「花鳥蒔絵螺鈿聖龕(三位一体像)」『Japan 蒔絵、宮殿を飾る東洋の燦めき』、京都国立博物館、2008年、88、248-249頁、図録40。

³² R. Rivera Lake, *El arte Namban en el México virreinal*, Ciudad de México, Estilo México Editores y Turner, 2005, p.315.

³³ アルゼンチンの美術収集家カルロス・ロドリゲス・ビビダル氏がスペインで購入し、その後1951年にブエノス・アイレス装飾美術館に贈与した。情報を提供していただいたマリア・カンボス氏に感謝する。

³⁴ Y. Kawamura, “31. Cruz de altar”, Kawamura [dir.] (前掲注5) p.414-415.



図10 サン・エステバン修道院蔵、南蛮漆器十字架



図11 サン・エステバン修道院蔵、南蛮漆器書見台



図12 トゥイ大聖堂蔵、南蛮漆器書見台

たので、フィリピンからメキシコ経由でスペインに届けられたことがまず確実である。同じ修道院に、ドミニコ会の紋章とロザリオが蒔絵と螺鈿で描かれている書見台（図11）が保存されている。元々はメディナ・デ・リオセコという町の修道院に伝わったものである。書見台というと90%以上の作品には「IHS」のイエズス会のマークが大きくあるので、これはとてもめずらしい作品であるということが指摘できる。マニラに宣教基地を持ったドミニコ会の特別注文品であったことが容易に察しでき、この作品もマニラ、メキシコを通してスペインへ届いたものである。



図13 ベドロソ村教会蔵、南蛮漆器洋櫃

その他に、ガリシア地方のトゥイ大聖堂にある細かい蒔絵で飾られた書見台（図12）は、1638年までカルタヘナ・デ・ラス・インディアス（コロンビア）の大聖堂にいた高僧ルエダ・リコが奉納したことが史料でわかっており、また、カナリー諸島にあるガルダル村教会の南蛮漆器の聖櫃に関しては、1626年にメキシコ在住のマリア・キンタナが奉納したという記録が残っている。リオハ県のベドロソ村教会には、幅の少々狭い洋櫃（図13）が保存されており、教会の史料を読むと、1669年にリマ在住のピヤレアル氏が故郷に奉納した可能性が非常に高い作品となる。軍人として出世した人間で、ペルーで描かれた彼の肖像画も教会に納められている³⁵。また一方では、レアル・デフェンサ侯爵家に代々伝わり、現在はナバラ美術館が蔵する洋櫃（図14）は、伯爵家に中南米で活躍した軍人や要人が多くいること、又、落ちてしまった螺鈿をどうやらメキシコの貝で修理した跡があるように思われることから、これも、マニラとメキシコを経てスペインへ運

³⁵ Y. Kawamura, "7. Arca", Kawamura [dir.] (前掲注5) p. 339-342.



図14 ナバラ美術館蔵、南蛮漆器洋櫃



図15 ビラノバ・デ・ロレンサナ村教会蔵、南蛮漆器洋櫃の金具部分

ばれたものと考えられる。

その他に注目すべきことは、スペインにはバロック調の銀細工が追加された南蛮漆器がいくつかあることである。ポルトガルに保存されている作品にはみられないので、ポルトガルルートで届いたものにはない特徴と言え、そうなると銀の豊かな中南米で追加されたのではないかと推測され、それを史料で証拠付けられる作品も確認されている。ルゴ県のビラノバ・デ・ロレンサナ教会の洋櫃（図15）



図16 ミランダ・デ・アルガ村教会蔵、南蛮漆器洋櫃

には、バロックスタイルの銀の金具が沢山追加されており、鍵の金具をよく見ると鳥の羽根の冠をつけたインディオ原住民の顔があり、中米で作られた銀細工であることがわかる³⁶。ナバラ県のミランダ・デ・アルガ教会には、銀系細工と赤や緑のガラス玉が追加されている小型の洋櫃（図16）がある。銀系細工は一七世紀のグアテマラの細工によく似た仕事であり、また一八世紀のメキシコ銀細工には赤や緑のガラス玉がよく使われたことが指摘できるので、中米で追加された装飾と考えられる³⁷。同種の赤や緑のガラス玉と銀細工が、アルカラ・デ・エナレスのサン・フアン・デ・ラ・ベニテンシア修道院の聖体入れ（図17）にも見られる³⁸。一旦中米へ届けられた後でこのような装飾が追加され、大事にされたのであろうことが想像される。

³⁶ Y. Kawamura, “9. Arca”, Kawamura [dir.] (前掲注5) p. 346-349.

³⁷ Y. Kawamura, “16. Arqueta”, Kawamura [dir.] (前掲注5) p. 339-342. Y. Kawamura, “8. Arqueta”, *Laca Namban. Brillo de Japón en Navarra*, Gobierno de Navarra, Pamplona, 2016, p. 76-77.

³⁸ Y. Kawamura & M. Nagashima, “20. Escritorio, transformado en sagrario”, Kawamura [dir.] (前掲注5) p. 382-387.

またウエルバ県のアヤモンテ教会にある銀細工の十字架と飾り付きの洋櫃（図18）は、史料からゴンザレス・デ・アギラール氏が1696年に遺言書を通して教会へ奉納したことがはっきりしている。彼はセビリアで中南米との貿易に手がけ一代で大金持ちになった人間であるので、中南米経由でこの洋櫃を入手したということはほぼ確かである³⁹。つまりこの作品もマニラとメキシコ経由で、最終的にスペインへ届けられた品であろう。よく似た銀細工付の洋櫃が、セビリアのエスピリトゥ・サント修道院（図19）にあることにも言及しておこう⁴⁰。



図17 サン・フアン・デ・ラ・ベニテンシア修道院蔵、南蛮漆器聖体入れ



図18 アヤモンテ市教会蔵、銀細工の十字架と飾り付きの南蛮漆器洋櫃



図19 エスピリトゥ・サント修道院蔵、銀細工の十字架と飾り付きの南蛮漆器洋櫃

日本美術が中南米へ残した影響

以上日本の漆器や屏風が中南米へ届けられたことを見てきたが、次にこれらの日本美術の影響を受けて一七世紀後半に生まれた中南米美術に焦点を当てたい。当時の中南米はクリオージョ文化、混血文化の土地である。現地文化の上にヨーロッパ文化、アジア文化をコンプレックスなしでどんどん取り入れて、独自のものを作るという土地がらであった。

その中でメキシカン・ラッカーに注目しよう⁴¹。この工芸技術はアステカ時代からあったもので、アヘという昆虫の油、チアという植物の油、との粉のような岩石のパウダーを混ぜてできたペースト状のものを木の皿やカップに塗るというもので、これによって木製の容器は硬化し、液

³⁹ Y. Kawamura, “Laca urushi de estilo Namban y su influencia en las artes de la América virreinal. Un estudio a través de las obras conservadas en Navarra”, *Laca Namban. Brillo de Japón en Navarra* (前掲注37) p. 22-59.

⁴⁰ Y. Kawamura, “13. Arca”, Kawamura [dir.] (前掲注5) p. 358-361.

体を入れても漏れず、虫の害も少なくなる。アステカ時代は実用的な皿やコップが主であったが、一七世紀後半から美術品として発展し、南蛮漆器に似た櫃、箆笥、箱などが作られ出す。南蛮漆器のように、草木花鳥の模様が詰まって描かれおり、縁取りも有る。メキシコ・シティーのフランツ・マイヤー美術館にある小型の洋櫃（図20）はまさにこの特徴を示しており、縁取りには南蛮漆器によく見かけられる鋸歯文や七宝に似た幾何学模様が見られる。南蛮漆器がヌエバ・エスパーニャで知られるようになった時代に、その美しさに惹かれて、独自の技術でまねをして制作したと考えて間違いのないであろう。これらのメキシカン・ラッカーが発展した地方はミチョアカンやオリナラ、そしてバスクアロであって、アジアの品がアカプルコに到着した後メキシコ・シティーにまで運ばれる道の途中に位置する地方である。

メキシカン・ラッカーは一八世紀にはより発展し「マケ」と呼ばれるようになる。明らかに「マキエ」からきた言葉であり、作品も

黒地に金模様とより蒔絵的となる（図21）。しかしこの発展には、ヨーロッパからメキシコに伝わってきたシノワズリー（中国スタイル）ブームも影響していると考えられる。

その他に、一七世紀の後半にメキシコで生まれた美術にエンコンチャド絵画というものが挙げられる。油絵と螺鈿の混血児のような絵画である。薄い貝の真珠層を木のベースに貼付けて、その後油絵で仕上げるもので、螺鈿のふんだんな南蛮漆器によく似てキラキラ輝く。しかし、アステカ文化でも貝の真珠層を薄くして工芸品にするという技術は発展していたことも忘れてはならない。マドリードのアメリカ博物館にある24パネルからなる『メキシコ征服』は有名なシリーズ作品（図22）であるが、ミゲール・ゴンザレスとその兄弟フアン・ゴンザレスが描いた作品で、絵自体はヨーロッパ風である⁴²。しかし上部のアーチ状の部分は、黒字に花鳥が詰まって描かれており、南蛮漆器の模様そのままである⁴³。その他に同博物館にある『マリアの一生』や『キリ



図20 フランツ・マイヤー美術館蔵、メキシカン・ラッカーの小型洋櫃



図21 アメリカ博物館蔵、メキシカン・ラッカー大盆（©Museo de América）

⁴¹ T. Castelló Iturbide, "Maque o laca", *Artes de México*, 153, México D. F., 1972, p. 33-81. S. Pérez Carillo, *La laca mexicana. Desarrollo de un oficio artesanal en el virreinato de la Nueva España durante el siglo XVIII*, Alianza Editorial y Ministerio de Cultura, Madrid, 1990.

ストの一生』のシリーズ作の額縁の縁取りに注目すると、日本風の鋸歯文や七宝繋があることがわかる⁴⁴。

エンコンチャドは主として絵画が知られているが、この技法でできた家具もある。前記のアメリカ博物館には家具の一部と思われるアーチ状のプレートが保存されており、アトラスの神話が描かれている。南蛮漆器の書簞筭によく見られるアーチ模様と極似している。家具が完全な形で残っている例は、今のところ世界で一点ナバラ県のアーヨ村教会にあるのが確認されている。柱が周りに施されている六角堂の聖櫃(図23)である。マサチューセッツ州のピーボディ・エセックス美術館の南蛮漆器の聖櫃⁴⁵と比較すると、オープン状が閉まっているかの違いはあるが、同じ六角堂で六角のドームを持つ点はよく似ている。このような南蛮漆器の六角堂を見て、エンコンチャドで作って見ようと発想したのではないかと思われるのである⁴⁶。描かれている葡萄の葉の表現も南蛮漆器のぶどうと極似、また柱に繰り返し描かれている星模様のパターンも、南蛮漆器にみられる文様である。



図22 アメリカ博物館蔵、エンコンチャド絵画『メキシコ征服』
(©Museo de América)

その他に、やはり一七世紀にメキシコ屏風が生まれる。明らかに日本の屏風を真似て作られいる。格子状の木組の上に麻の布が貼られていて、その上に油絵で風景や人物が描かれているものである。スペイン語では「*biombo*」と呼ばれるもので「ビョーブ」を語源とした単語である。英語では単に「*folding screen*」であるが、ドイツ語では「*Spanisch Wand*」(スペイン壁)と呼ばれているので、この種の家具はスペインから来たという感覚をドイツ人は持っていたことがわかる。アメリカ博物館(マドリッド)はこの種の作品をいくつか所蔵しており、その一点「メキシコ・シティーの副王宮殿」(一七世紀後半)はよく知られた作品である⁴⁷。桃山時代の洛中洛外図のように街角で生活をする一般の人々が描かれおり、やはり桃山時代の絵に見られるレリーフ状の模様がある金の雲が飛んでいる。裏張りも非常に日本的な模様である。メキシコのフランツ・

⁴² C. García Saiz, *La pintura colonial en el Museo de América. II. Los enconchados*, Ministerio de Cultura, Madrid, 1980, p. 21-22.

⁴³ S. Ocaña, "Enconchado frames: The Use of Japanese Ornamental Models in New Spanish Painting", P. Donna & R. Otsuka [ed.], *Asia & Spanish America. Trans-Pacific Artistic & Cultural Exchange 1500-1850*, Denver Museum, Denver, 2009, p. 129-149.

⁴⁴ Y. Kawamura, "Laca urushi de estilo Namban y su influencia en las artes de la América virreinal. Un estudio a través de las obras conservadas en Navarra", *Laca Namban. Brillo de Japón en Navarra* (前掲注37), p. 22-59.

⁴⁵ O. Impey & C. Jörg (前掲注5), p. 194, cat. 466.

⁴⁶ Y. Kawamura (前掲注44) Y. Kawamura, "18. Sagrario", (前掲注37) p. 22-59, 98-99.



図23 アーヨ村教会蔵、エンコンチャドでできた聖櫃



図24 ビエナ侯爵邸蔵、メキシコ屏風

マイヤー美術館やソウマヤ美術館に優れた作品が保存されている⁴⁸。最近スペインで見つかった作品として、ビエナ侯爵邸の屏風（図24）があげられる。やはり一七世紀後半の作品と思われ、同じようなレリーフ状の模様のある金の雲が飛んでいる。

このような日本の美術の影響は中米だけでなく南米の工芸にも見ることができる。パスト・バーニッシュと呼ばれる木製品の装飾技法である⁴⁹。コロンビアのパストという町の名前が源であるが、インカ帝国時代からコロンビアの南西部や、ペルーのアンデス地方で知られていた技術である。パスト地方に生息するゴム系のモパモパの木の樹脂が原料である。樹脂の小さな固まりを集めて、口の中で噛み不純物除くという作業を原住民は行っていた。その後に湯で炊くともっとゴム状になって、両手で引っ張るとセロファンか玉ねぎの薄皮のような薄さまで伸び、薄い半透明のシートが得られる。またいろいろな染料で着色もできる。このさまざまな色のシートを木

⁴⁷ T. Castelló Yturbide & M. J. Martínez del Río, *Biombos mexicanos*, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, 1970. *Los palacios de Nueva España. Sus tesoros interiores*, Museo de Monterrey y Museo Franz Mayer, Monterrey, 1990, p. 18-20, 121. C. García Saiz, *Un arte nuevo para un nuevo mundo: la colección virreinal del Museo de América de Madrid en Bogotá*, Museo de América, Madrid, 2004, p. 48. 畑靖紀「メキシコのピオンボ：副王宮殿図屏風をめぐる諸問題」『東風西声、九州国立博物館紀要』10号、九州国立博物館、2014年、107頁～。

⁴⁸ T. Castelló Yturbide & M. J. Martínez del Río(前掲注47)。G. Curiel, *Viento detenido. Mitologías e historias en el arte de biombo*, Museo Soumaya, Asociación Carso A. C., Mexico D. F. 1999. D. Carr, “Chinoiserie in the Colonial Americas”, D. Carr [ed.], *Made in the Americas. The New World Discovers Asia*, Museum of Fine Arts Boston, Boston, 2015, p. 100-131.

⁴⁹ L. E. Mora Osejo, “El barniz de Pasto”, *Caldasía*, vol. 11, 55, Bogotá, 1977, p. 5-31. M. Codding, “The Decorative Arts in Latin America, 1492-1820”, J. Rishel & S. Stratton-Pruitt [eds.], *The Arts in Latin America. 1492-1820*, Philadelphia Museum of Art, Philadelphia, 2006, p. 98-113. M. Codding, “The Lacquer Arts of Latin America”, D. Carr [ed.], *Made in the Americas* (前掲注48) pp. 74-89.

のベースの上に張り、また様々な形に切り取って何枚も重ねて張っていく技法である。最終的に熱の上であぶると硬化するので、液体を入れても漏れず、虫の害も防げる。艶があるのでパストの「バーニッシュ」という名前がスペイン人によってつけられたが、刷毛でぬるニスのようなものではない。インカ文化では、儀式用のケロと呼ばれる盃をこの技術で作っていた⁵⁰。しかし一七世紀後半から南蛮漆器に似た小型の櫃、筆筥、箱などが作

り出されるようになった。草木、鳥、動物がぎっしり描かれていて、また縁取りがあるところは、南蛮漆器と共通している。縁取りに七宝をまねている作品も確認されている。ニューヨークのヒスパニック・ソサエティー・オブ・アメリカにある引き出し数個を備えた箱は、少々レリーフ状の模様となっており、猿が蔓状の植物の上にいる有様が描かれている。最近この作品と琉球漆器との類似が指摘されている⁵¹。

またパスト・バーニッシュの中に「輝くパスト・バーニッシュ」(図25)というものがある。モバモパのシート

を重ねる際に、薄い銀箔を間に入れて上に半透明で少し色の着いたシートを重ねるという作業をしており、日本の漆芸技術の梨地によく似た輝きを示す。上から重ねられたシートで空気とのコンタクトが避けられているので、銀は酸化せず数世紀後の今でもキラキラと輝いている。顕微鏡で見ると(図26)細かい作業をしていることがよくわかり、金色銀色の梨地のような様子も観測することができる。これもやはり南蛮漆器の影響を受けて発展した工芸と言えよう。



図25 パンプローナ大聖堂蔵、輝くパスト・バーニッシュ小型洋櫃



図26 同洋櫃の詳細拡大写真

結 論

まとめとして次の点を再度強調したい。南蛮時代をスペイン帝国側から見ると、中南米もアジアも「インド」と呼ばれた時代で、その中に日本も含まれていたという事実を認識する。そして、スペイン帝国に届けられたアジアの工芸品や美術品に焦点を当てると、日本の漆器や屏風、中国

⁵⁰ R. Newman & M. Derrick, "Painted Qero Cups from the Inka and Colonial Periods in Peru: An Analytical Study of Pigments and Media", *Materials Issues in Art and Archaeology VI: Symposium Held November 26-30, 2001, Boston*, Warrendale, Materials Research Society, 2002, p. 291-302.

⁵¹ M. Coddling, "The Lacquer Arts of Latin América" (前掲注49) p. 80-81.

磁器、マニラやインドの象牙作品が当時貴重されたことが、現存する作品及び古文書の史料から知ることができる。また、日本から中南米へ届けられた美術品がかなりあり、漆器や屏風がその中心であったことがわかる。また南蛮漆器もかなりの数が中南米へ渡り、そこからスペインまで届けられている。その裏には、一六世紀一七世紀のマニラ～アカプルト間を結んだマニラ・ガレオン船が大きな役割を果たしていた事実がある。このルートで中南米へ渡った日本美術品は、一七世紀後半に中南米美術へ大きな影響を残している。メキシカン・ラッカー、メキシコ屏風、エンコンチャド絵画と家具、パスト・バーニッシュがその代表的なものといえる。

日本は鎖国後、江戸時代に外国からの影響を余り受けずに日本独特の文化、美術、工芸を作り上げてきたという歴史があり、その重要さの故、日本美術の海外との関わりや海外美術への影響ということを余り考えない歴史が築かれてきたのではないだろうか。そして、南蛮時代とは日本史の中で特殊な時代という歴史観ができてきたのではないだろうか。その意味では、南蛮時代を逆サイド、つまりスペイン帝国側からとらえ、世界初めてのグローバル化時代の一角であるという見方を持つことにも意味があるのではないかと思う。

(2016年10月13日 受理)